【歴史から未来へ導く】

「平家の落人伝説を歩む①」

今月は、大原小学校で調べた内容や町史からの情報をもとに制作しました。

錦江町の大原には、その昔、平家一族が安住の地を求めて住み着いたという伝説が残っています。京都の北の方に「大原」というところがあり、地形が似ていることから、連想して「大原」という地名が付いたというものです。大原地区の北の方に荒西山がありますが、これも京都の嵐山を連想して付けられたという説もあります。

平家落人伝説とは、次のようなものです。

寿永4年（1185）、源平最後の戦いである壇ノ浦の戦いに敗れた平家方の人は、源氏の追っ手から逃げました。九州を南下中、大隅海峡で暴風に遭って、大隅半島にある内之浦の大浦に上陸します。さらに、一行の中には大浦から大原へ移住した人もいました。中野、大浦地、大原の3戸が落人の末裔で、宗家です。山神山の早馬神社には、氏神の4社が並んでいますが、3家のものです。大浦から落ち延びた一族は本家をそのままにしてさらに分家し、田代や大根占の半ヶ石、毛下、池田、段などに別れ別れになっていきました。

また、『大根占町誌』（増補改訂版）には、次のように書かれています。

●禰寝地方の佐多（辺塚、郡、竹之浦）田代（大原）大根占、池田（半ヶ石、段、毛下）宿利原（笑喜、落河、大尾）など平家落人の集落と伝えられている所が相当数あり、いろいろの点から総合的に考察すれば、そのいくらかは事実と思われる。

●壇ノ浦より落ち延びた一族は内之浦町大浦より、峻険な稲尾嶽の麓を山越え、田代町大原に出て、さらに奥地へと進み、一の野二の野の山を越え、ようやく見出したのが半下石であった。

また、江戸時代、薩摩藩の農業の制度として門割制度というのがありました。一つの村をいくつかの方限（組）に分け、さらにいくつかの門に分ける。一つの門は、ある一定の土地を与えられた農民の生産共同体です。名頭という頭と名子という一般の農民の数家族で構成されていました。

江戸時代の名残があった明治3年（1870）の調べでは、田代郷（当時は麓村と川原村の2村から構成されていた）は、麓村に39門、川原村に32門ありました。麓村の39門の中に、大原・中野・大浦地という3門があります。この3門は、落人の末裔とされる3家と同じです。

歴史的な研究によれば、平家の落人伝説は後世に作られた単なる伝説にすぎないといわれますが、真偽のほどはともかく、そのようなことを背景として、地域づくりを進めてきた、ということの方が大事なことなのでしょう。次号は平家の落人が歩んだとされる、半ヶ石へ向かって歩んでみたいと思います。

今月から、錦江町の歴史や言い伝え、昔の遊びや行事など、特集を組んで取り上げて行きたいと思います。町史や各資料より調べ掲載していきますが、掲載した内容と違う見解の資料などありましたら、錦江町役場企画課広報へご連絡下さい。錦江町の歴史や文化をひも解き、観光や地域づくりに繋げて行きたいと思います。また、個人でお持ちの歴史的資料や写真、言い伝えなどありましたら、取材や調査に行きたいと思いますのでご連絡下さい。

【問い合わせ先】　錦江町役場 企画課　TEL 0994-22-3032